

こころの玉手箱



スウェーデン製の猫

一目ぼれした猫の置物

二〇〇〇年に福祉政策などの視察でスウェーデンを訪れた。ストックホルムでホテルに缶詰め、会議室と自室を往復

寒い冬場に、背中を丸めてじっとろろすくまっっている。縁側で微動だにせず日なたぼっこ。息づかいまで伝わってきそうな猫だ。頭の後ろあたりが何とも言えずいい。素焼きの陶器製だが、生きているような温かみさえ感じてしまう。

二、三年、そんな半野良状態が続いたろうか。ある時、十日ほど外国に出張して、帰ってきたら姿を見せなくなっていた。猫なんてそんなものかな。でも、盛岡の冬を野良猫が越すのは結構大変だろうな。気がつけばもう猫派だった。

公舎だし、留守がちなので飼うのはためらった。せめてもの癒やしに、と置物や写真集などを集めた。

丸い背中に癒やされる

するだけの滞在だった。どこにも出られず残念だなと廊下を急いでいると、ショーウィンドーの丸い背中がパツと目に入った。

一目ぼれで購入。壊れないようしっかりと箱に詰めてもらい、随行の秘書を呼び倒してスーツケースの半分ほどを占拠。苦勞して持ち帰った。我が家の応接間の飾り棚には小ぶりの置物もたくさん鎮座しているが、これは本物並みの体格だ。猫好きの来客は両腕に抱いて写真を撮っていく。

知事を辞め、本物を飼おうかと思つた矢先の入閣で、なかなか余裕がない。総務相を退く時が来たら、飼うつもりでいる。たまにペットショップで品定めしてみると、高貴で高価な猫が多いのに驚く。そこらで見かける野良の子猫の方がかわいいなと言う気がしている。スウェーデンの子と同居する日はいつだろう。

次週は画家の絹谷幸二氏です。